

『夜寝覚拔書』の解読法

著者	田中 登
雑誌名	國文學
巻	82
ページ	1-6
発行年	2001-03-17
URL	http://hdl.handle.net/10112/5091

『夜寢覚拔書』の解読法

田中 登

平安後期物語の傑作として知られる夜半の寢覚には、現存諸本いずれも中間と末尾とに欠巻があることはよく知られた事実で、これまで欠巻部の内容を窺わせる資料としては、無名草子・拾遺百首歌合・風葉和歌集・改作本寢覚物語・寢覚物語絵巻・伝慈円筆大六半切寢覚物語などの存在が知られてきたが、近年になって、中間と末尾の欠巻部からいくつかの場面を抜書きした『夜寢覚拔書』なる書物が出現し、学界の注目するところとなったのは、いまだ記憶に新しい事柄である。

この『夜寢覚拔書』については、最近伊井春樹氏が論考を公にしているが、その解読法には、私にいささか疑問と思われるところがないわけではないので、改めてここに同書を取り上げ、その解読法を試みてみる次第である。

まず解説に先立って、これまでこの『夜寢覚拔書』について触れた文献について簡単に解説しておく。

- (1) 『思文閣古書資料目録 善本特集 第八輯』（平成八年六月）
- (2) 田中登『古筆切の国文学的研究』（風間書房 平成九年九月）
- (3) 「月刊文化財」四一七号（平成十年六月）
- (4) 『大阪青山短期大学所蔵品図録 第二輯』（平成十一年九月）
- (5) 伊井春樹『夜の寢覚』散逸部分の復元——新出資料『夜寢覚拔書』をめぐる——」（国語と国文学 平成十二年八月号）

この『夜寢覚拔書』は、(1)の思文閣の目録によって、初めてその存在が世に知られることとなったが、目録の写真版で紹介されているのは当該本の全文ではなく、本文が記されている卷子本五紙分の内の四紙分にすぎない。しかし、本文中に見出される九首の和歌の

内、五首までが従来知られていなかった多くの新出歌である旨、解説で述べている。

この目録によって、その資料的意義を知った稿者は、折から校正中であった(2)の『古筆切の国文学的研究』の第六章第三節「夜半の寢覚」末尾欠巻部の考察の項の末尾に付記として(1)の目録に言及し、目録図版によって末尾欠巻部に係わると思われる二つの場面を翻刻、紹介した。

(1)の目録によって世に紹介された後、該本は大阪青山短期大学の所蔵に帰し、平成十年度の国の重要文化財に指定されたが、(3)の文献が該本の書誌的事項を簡潔に説明している。

その後、(4)の図録が出版されるに及んで、『夜寢覚抜書』は全文が写真で公開され、容易にその全貌に接することができるようになったのである。

(5)の伊井論文は、平成十一年十一月に天理大学で行われた関西平安文学会の口頭発表を活字化したもので、この『夜寢覚抜書』の資料的意義を論じた最初の本格的論文とあってよいものであろう。

しかしながら、その解説法には問題がある。当該書は寢覚物語の中間と末尾の欠巻部から印象的な場面を選び、それを流麗な筆致で散らし書きにしたものだが、その解説法は、前から順次読み進めていくのではなく、平安・中世の仮名消息を読むのと同じ要領で、ま

ず中央の大きな文字を右から左へとしかるべき所まで順次読み進めた後、また始めに帰って、上段に記された小さな文字を追って読んでいかなければ、意味をなさないのである。以下、この方法に従って読み進めていくことにしたい。

三

当該本の本文を記した部分は卷子本の五紙からなるが、第一場面は、第一紙中央の大きな文字「はるやむかしの」から「あさぼらけの」まで読み進め、次いで第一紙上段のやや小さな文字「そらのけしきも」から第二紙の「契なりけん」までで、これは中間欠巻部の一場面。以下、普通の形で翻刻すると、左のようになる(私に適宜濁点・句読点を施す)。

はるやむかしのとのみ、このごろのよとてもねざめ□□に、かゝるまゝにながめあかしたまへるあさぼらけのそらのけしきも、おもふどちみし世のことは、まづしのばしうおほしいでられて

さきにはふはなもかすみもみやこにてみしながらなるはるのあけほの

あはれなとかげをならべて山のはにすみはつまじき契なりけん

父の住む広沢の邸に身を寄せた寢覚君が、かつて姉とともに仲睦まじく暮らしていた頃を懐かしく回想している場面であろう。

一首目の「さきにはふ」の歌は、次に挙げるように、拾遺百番歌合や風葉集に採られている（引用はいずれも岩波文庫で、傍線は私に付す）。

広沢に独りながめて、姉の上もろともに起き臥し慣れにし
方を思ひ出で給ふにも、「春や昔の」とのみ偲ばれて

咲き匂ふ花も霞ももろともに見しながらなる春のあけぼの（歌
合三番右・二〇六）

傍線を施した部分は、先の『抜書』に「はるやむかしのとのみ、まづしのはしうおぼしいでられて」とあるのに照応する。

広沢に住み侍りけるころ、朝ぼらけの空の気色にも、見し
世のこと思ひ出でられければ 寢覚の広沢の准后

咲き匂ふ花も霞も都にて見しながらなる春のあけぼの（風葉集
卷二・八七）

傍線部は、『抜書』の「あさばらけのそらのけしきも、おもふどちみし世のことは、まづしのはしうおぼしいでられて」とある部分に該当しよう。

四

第二場面は、第二紙の大きな文字の「ひるはをぐらの…」から始まって、第三紙最後の「いのちありやと」まで読み進め、次に第三紙上段の小さな文字の「いまはいと…」から第三紙最後の「あらじと思を」まで。やはり中間の欠巻部の一場面である。

ひるはをぐらのやまをながめくらし、よるはねざめてかゝるあらしをきゝわたすらむほどよ。うき世を思いるも我ゆへぞかしなど、かきつゞけなみだのみよどむまもなく、人めもたえて、さる世ばなれたるさよなかに、いふかたなくきよらにうつくしげなる御さまどもに、かたらひながめたまひたるは、ちとせをすぐしても、あく世あるまじきに、そむきへだゝりわかれたまひなん、げにいとうれはしきことなりや。

たぐひあらばとはまし物をいとかゝるわかれたたふるいの
ちありやと

いまはいとゝおもひいでじをぬるたまのなにとみえつるゆ
めにあるらむ

ぬるたまのゆめのうちなる身ともがなすべてこの世にあら
じと思を

寢覚君が老閨白と強制的に結婚させられることになった折、広沢

での男君と寢覚君の一夜の逢瀬と別れとを描いた場面であろう。こ
こに出てくる三首の和歌は、拾遺百番歌合にも風葉集にも見出せな
いものばかりである。

五

第三場面は、第四紙の大きい文字の「月はいみじう」から始ま
り、第五紙の最初の大きな文字の「夜半のわかれににたるそらかな」
まで。これまた中間の欠巻部の一場面である。

月はいみじうきりわたり、むしのこゑくみだれあひたるに、
とがめがほなるかぜのをとなひも、山ざとにて、すみはつまじ
き、ときこえしほど、わかれいでにし夜の心地おもひいでられ
て、こよひもいとなかくなるこゝろづくしなり。人やりなら
ぬ涙にくれて

かぎりとしていのちをすてしやまざとの夜半のわかれににた
るそらかな

老閑白が没した後、久し振りに男君と寢覚君が巡り会った場面であ
らう。この歌は拾遺百番歌合に次のように見えている。

年久しく絶えて後、巡り逢ひ給へる秋、月の光、虫の声も、
ただ昔ながらの心地して、いし山にて、「住み果つまじき
契りなりけむ」ときこえしほど、別れ給ひし夜の心地おほ

し出でられて、なかなか心尽しもやや立ちまざるに、人や
りならず、涙にくれて

閑白

限りとて命を捨てし山里の夜半の別れに似たる空かな（歌合十

番右・二二〇）

傍線を施した部分が、『抜書』の「月はいみじうきりわたり、む
しのこゑくみだれあひたるに、すみはつまじき、ときこえしほ
ど、わかれいでにし夜の心地おもひいでられて、こよひもいとなか
く／＼なるこゝろづくしなり。人やりならぬ涙にくれて」の箇所には
ほ該当する。

六

第四場面は、第四紙上段最初の小さな文字の「からうじて」か
ら始まって、順次左へ読み進め、第五紙始めの小さな文字の「たへ
ずかなし」までいき、引き続き第五紙の大きな文字「ますかぐみ
なれるわが身ぞ」まで。

からうじて御ぐしかきいでたれば、ありしなごらなり。またか
ほいかならんとおもひて、きやうだいのかぐみにうつしてみむ
と思に、いとおそろしげにやあらむと、我ながらなまをそろし
くてみたまへば、いみじうやせおとろへかはりたれど、みし世
のかげにもかはらざりけりとばかりみるに、我ながらいとたへ

ずかなし。

ますかゞみうつれるかげはかはらぬをやよこはいかになれ
るわが身を

これは、すでに拙著『古筆切の国文学的研究』でも述べたように、
末尾欠巻部において死んだと思われていた寢覚君の蘇生直後の様子
を描いた場面であろう。この「ますかゞみ」の歌は、拾遺百番歌合
にも風葉集にも見られない新出歌である。

なお、伊井論文では、第四紙を右から順に大きい文字も小さい文
字も区別なく解説しているため、この場面は、本稿の五で取り上げ
た中間の欠巻部（第三場面）と文章が入り混じっており、その結果
『抜書』は、原作の中間欠巻部三場面、末尾欠巻部一場面とから成
るもの、という扱いをしている。

七

第五場面は、第五紙の「あはれ我を……」から始まって、最後の
「おもひいづらむ」まで。この場面に関しては、伊井論文の解説
にとても異見があるわけではない。

あはれ我を思いつる人もあらむかし。三位中将山ふかくあとを
たちたえこもりたるらむ心□しのほどよ。いかでゆめ□うちに
も、□くてあるぞとしらせてしがな。おさなき人／＼のさま

／＼恋しきなど、身をせむるやうに、いとたへがた□にも、も
のおもふ秋はあまたへにしかど、いとかくしもは、おぼえざり
きかし。

しはれわびわがふるさとのおぎの葉にみだるとつげよあき
のゆふかせ

しらざりし山ちの月をひとりみて世になき身とやおもひい
づらむ

末尾欠巻部の一場面。母親が死んだとばかり思い込んだ真砂は世
をはかなくて北山へ籠り、そのことを伝え聞いた寢覚君が思い悩ん
でいる情景であろう。

ここに出ている「しはれわび」と「しらざりし」の二首の和歌は、
拾遺百番歌合と風葉集に、それぞれ次のように採られている。

白河の院にて、身の有様おぼし続くる夕暮に

しをれわびわがふるさとの萩の葉に乱ると告げよ秋の夕風（歌
合九番右・二一八）

忍びて白河の院に侍りけるに、物思ふ秋はあまたありしか
ど、いとかうはあらざりきかしとながめわびて

寢覚の広沢の准后
しをれわびわが古里の萩の葉に乱ると告げよ秋の初風（風葉集

卷四・二二九）

傍線部は『抜書』の「ものおもふ秋はあまたへにしかど、いとかくしもは、おぼえざりきかし」の部分に該当しよう。

右大将、三位中将ときこえし、北山にこもり給ひぬと伝え聞きて

知らざりし山辺の月を独り見て世に亡き身とや思ひ出づらむ

(歌合八番右・二一六)

世になきさまに聞こえて後、右大将、北山にこもれりと伝え聞きて、月の明かりける夜、ながむらん面影も見る心地して思ひやられければ

知らざりし山辺の月を独り見て世に亡き身とや思ひ出づらん

(風葉集卷十七・一二七〇)

拾遺百首歌合や風葉集の詞書の傍線部は、『抜書』の「三位中将山ふかくあとをたちたえこもりたるらん」の部分に照応しよう。

八

以上、近年世に紹介され、話題を呼んだ大阪青山短期大学所蔵の『夜寝覚抜書』の解説法について述べてきた。該本は、原作の中間欠巻部から三場面、末尾欠巻部から二場面を選んで抜書きしたものであるが、五つの場面はいずれも和歌で終わっており、和歌を中心とした叙情的かつ印象的な場面が選ばれているとみてよからう。金銀の

箔や泥を駆っての華麗な装飾料紙を使用している点や、巧みな散らし書きをもって記されている点などを考慮に入れると、該本は王朝物語のテキストを忠実に伝えようとする意識はきわめて薄く、書の鑑賞を主眼とした権門貴紳のための豪華調度品として製作されたものと思われるのである。が、それにしても、なにゆえ中間欠巻部と末尾欠巻部からわざわざ場面を選択したのか、不思議というよりほかないが、この点については、さらに今後の検討に委ねたいと思う。

ともあれ、この『抜書』の出現によって、夜半の寝覚の欠巻部の内容を窺うことのできる資料も、次のことく豊富になったのである。

中間欠巻部 無名草子・拾遺百首歌合・風葉和歌集・改作本寝覚物語・夜寝覚抜書

末尾欠巻部 無名草子・拾遺百首歌合・風葉和歌集・寝覚物語

絵巻・伝慈円筆大六半切寝覚物語・夜寝覚抜書

(たなか のぼる／本学教授)